

茨木市立豊川小学校 全国学力・学習状況調査分析結果

令和3年10月作成

【今年度の結果と取組みについて】

〇●国語●〇

(領域ごと)

- | | |
|------------------|---------------|
| ①言葉の特徴や使い方に関する事項 | 課題が残る結果であった |
| ②A話すこと・聞くこと | やや課題が残る結果であった |
| ③B書くこと | 課題が残る結果であった |
| ④C読むこと | 課題が残る結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|---------------|
| ①選択式 | 課題が残る結果であった |
| ②短答式 | 課題が残る結果であった |
| ③記述式 | やや課題が残る結果であった |

(無解答率)

やや課題が残る結果であった

(その他)

学校の特徴的なことについて記入

- ・全国平均と比べてもっとも正答率の高かった設問
 - ・【資料】の文章の中の「より」と同じ使い方として適切なものを選択する
- ・全国平均と比べてもっとも正答率の低かった設問
 - ・漢字の書き取り(ころがっている)

分析

「目的に応じ、話の内容が明確になるようにスピーチの構成を考える」の設問で正答率が高かった。問題文の構成として「事実である二つの業績」と「そこから考える自分の感想」とを区別することで話の中心である業績がより明確に伝わるような文章となっている。普段から意見と事実を見極めることを国語科の授業だけでなく、いろいろな教科や場面で考えることを大切に行っている成果であると考え。反対に正答率が低く、全国の正答率と最も開きがあったのは「目的や意図に応じて、理由を明確にしながら、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する」設問であった。自分の主張を明確に、筋道の通った文章を書くためには、自分が主張したいことは何か、それを支える理由や事例は何かを明確にする。その上で理由や事例を文章全体の中でどのように配置すれば自分の主張が効果的に相手に伝わるかということを考えることが大切である。授業の中で意見文を書くことや各教科でふりかえりを書くなど文章を書くことに慣れさせる経験を積ませたい。

〇●算数●〇

(領域ごと)

- | | |
|----------|---------------|
| ①A数と計算 | 課題が残る結果であった |
| ②B図形 | 課題が残る結果であった |
| ③C測定 | やや課題が残る結果であった |
| ④C変化と関係 | 概ね良好な結果であった |
| ⑤Dデータの活用 | やや課題が残る結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|---------------|
| ①選択式 | やや課題が残る結果であった |
| ②短答式 | やや課題が残る結果であった |
| ③記述式 | 課題が残る結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

学校の特徴的なことについて記入

- ・全国平均と比べてもっとも正答率の高かった設問
- ・学年ごとの本の貸し出し冊数について、棒グラフから分かることを選ぶ
- ・全国平均と比べてもっとも正答率の低かった設問
- ・「114」は二次元の表のどこに入るかを選ぶ

分析

「棒グラフから、項目間の関係を読み取ることができる」の設問で全国よりも高い正答率となっている。これは、本校の課題の一つである家庭学習の定着が、休み時間の学習室の開放や放課後学習などで一定解消の方向にあり、その結果が基礎学習の定着という形でみられたものと考えられる。反対に正答率が低く、全国の正答率と最も開きがあったのは「データを二次元の表に分類整理することができるかどうかをみる」設問であった。児童の誤答を見てみると、縦の項目も横の項目も、どちらもとらえることができている児童が多くいた。これは二次元の表の見方がしっかりと定着していないことが原因と考えられる。表の見方を学習するだけでなく、目的に応じて集めたデータを二つの観点から二次元の表に分類整理する活動を実際に経験するなど、学んだことを使って自分の生活にいかす経験が必要だと考える。また、記述式の問題での正答率が低く、無回答率も非常に高い数値であった。問題の正答・誤答だけでなく、なぜそのように考えたのか、自分の考えを言葉で表現する活動を授業の中で設定していきたい。無回答率に関わっては、問題を読んで何が問われているのかよくわからず、問題を解くことをあきらめてしまった子どもがいると考えられる。複数の資料から必要なことを使う経験や問われていることに的確に答えることを学習活動の中に取り入れていきたい。

〇●経年比較●〇

全体的な傾向についての分析

今年度は算数、国語ともに課題が残る結果となった。しかし、「算数が好きか」の質問項目において全国平均を大きく上回っており、本校で進めている『聴き合い学び合う授業づくり』の成果がみられた。子どもたちの意欲を点数で見える学力にもつなげる取り組みを大切にしていきたい。

また、無回答率が高いことも課題である。最後まであきらめずに取り組める力をつけていきたい。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

ここ数年はこれまでの結果を近似曲線で分析すると、学力高位層は、増加しており、学力低位層は減少していたが、今年度は高位層が減少し、低位層が増加する結果となった。学校として、ペア学習やグループ学習を取り入れた学習形態が感染症の影響で出来なくなったことも要因の一つだと考える。低学年からの学力保障や家庭学習の定着度を上げる取り組みなどを、丁寧に行い学習に対する意欲や関心につなげていきたい。

〇●取組み●〇

学力向上に関する取組み

授業づくり・・・1年間を通して、子どもの姿から授業者が学ぶことを大切にする。

「聴き合い学び合う授業づくり」として豊川中学校区で取り組んでいる、ペアやグループ活動を通して全員が参加し考えられる授業づくりに取り組む。

中学校区での研究会や校内での研究会などにおける話し合いを大事にして、授業力を伸ばし子どもたちが意欲的に取り組める授業をめざす。

家庭学習・・・生活アップ月間として年3回（6月、11月、2月）家庭学習を重点的に取り組む期間として、家庭や子どもたちに意識を促す。

25分休み、昼休み、放課後の補充学習は、学生や学習サポーターとともに日常的に行い、宿題でできていないところや授業で最後までできなかった問題等を最後までやりきれるよう支援する。「宿題は丁寧に家でする」を少しずつでも定着させたい。

読書活動・・・週2回の朝読は、教師も一緒に読書をして読む環境をつくる。

特に木曜日の朝読は、校内で共有できるよう同じ図書を使って「ペア読書」を行った後、言語活動を行うことを意識して内容について感想や意見を交流する。

図書館支援員とともに、より図書館利用が広まり、本を好きになる子どもたちが増えるように教室や図書室の環境を整える。

大学生やボランティア、保護者の読み聞かせなどにも今まで同様取り組んでいく。

漢字検定・・・3学期に実施する。保護者や地域の方にも呼びかける。

豊川スタンダード・学校生活や授業に関して、共通して理解しておくことを明文化したり視覚化したりして整えていく。

学習室の開放・・・25分休みや昼休みには、授業で分からなかったところや課題が残っている児童を支援する。放課後は、算数の宿題を中心に支援する。

教材の拡充・・・業務サポーターの協力を得ながら、具体物を使った授業を行うための教材の作成を行っている。複数の学年で活用できるように工夫している。

その他・・・子どもたちの実態を常に考慮しながら、学校生活を支え「学びたいという意欲」をつけていく。そのために、支援員、サポーター、ボランティア、SSWなどと協力して取り組むとともに、地域、豊川ネットとの連携も大切にする。